

担任が進める小学校外国語活動

～コミュニケーションの質を高める授業づくり～

M10EP008

弦間文

1. 実践研究の目的

(1) 研究の目的

平成23年度より、小学校では年間35時間の外国語活動が新設された。甲府市ALTが小学校を訪問する平均回数は、学級数により各校ばらつきはあるが、外国語活動時数の約1/2にあたり、総授業の半数は学級担任が単独で授業を進めていると予想される。ベネッセ(2010)の調査結果からも、中心となる指導者はALTから学級担任へと移っており、学級担任が中心となって進めている比率は、2年前の28.2%から66.6%と倍以上に増えている。これには、外国語活動の趣旨から、その指導には学級担任が欠かせないという理解が深まったことが背景にあるのだろう。その一方で、外国語活動の授業の進め方について、不安感や負担感を抱える学級担任は68.1%にのぼる。今までALT等の外国指導助手に指導を任せていたのが、学級担任主導にかわってきたからこそ、小学校教員が実際に指導していく中で、先述したような課題が生まれてきたのだと考える。

そこで本稿では、自身の授業実践から得られた知見をもとに、コミュニケーション能力の素地を育成するためには、どのような外国語活動の授業を展開していけばよいかを明らかにすることを、研究の目的としている。

(2) 実践研究の方法

まず、小学校の担任は中学校との連携をふまえ、外国語活動の目標である「コミュニケーション能力の素地」を育むために、コミュニケーションの質を高めた指導が必要であることを理論研究により裏付ける。次に、外国語活動の授業実践を分析し、コミュニケーションの質を高める授業について提示する。

(3) 先行研究との違い

外国語活動におけるコミュニケーションの質を高める授業づくりに関して土江(2010)は、国語・理科・道徳などの横断的な指導を行いながら考察を行っている。学級の児童が自尊感情を育て合うことでコミュニケーションの質が高まるとしているが、実際の外国語活動の中で、英語を通して積極的なコミュニケーション活動を実現する授業のあり方にはふれていない。

本研究では、外国語活動の授業でコミュニケーション能力の素地とされている「言語や文化に対する理解」「積極的にコミュニケーションを図る態度」「外国語の表現への慣れ親しみ」の内容達成をどのように図っていくか、第5学年外国語活動の授業を分析する。その際、中学校外国語科の目標でもある「積極的にコミュニケーションを図る態度」の育成に焦点をあて、小中連携をふまえながら、「コミュニケーションの質を高める授業づくり」についての一考察を述べる。

2. 研究の内容

(1) 小学校外国語活動がめざすもの

① 外国語活動と外国語科の連携

今日の中学校・高校英語の外国語科は、実践的コミュニケーション能力の育成を旨とする内容である。筆者が参観した中学校の授業でもオーラル・コミュニケーションを重視し、ペアワークやロールプレイなどを使ったコミュニケーション活動を展開していた。したがって、英語という言葉のコミュニケーション機能を重視するという点では、小学校の外国語活動も中学校も高校も最終的にめざすところ

ろは同じと言える。つまり、小学校外国語活動は、児童がこれから先、外国語を学んでいく上での入口にあたることを小学校の学級担任は、まず意識したい。

小学校外国語活動は、体験的に理解を深めることで、児童に言葉の大切さや豊かさに気付かせたり、言語に対する興味・関心を高めたり、これらを尊重したりする態度を身につけさせたりしていく。この学びが言語学習のベースとなり、中学校・高校の外国語科の学習につながっていく。

②体験させたいコミュニケーション活動

コミュニケーション能力の構成要素については長く議論されてきたが、学習指導要領のコミュニケーション能力の考え方は、Canale(1983)の考え方を基盤としていると青木(1992)は述べている。Canaleによると、コミュニケーション能力とは①文法能力②社会言語学的能力③談話能力④方略的能力の4要素からできているが、「初めて外国語に触れる児童は外国語の文法能力や、社会言語学的能力、さらに談話能力などは皆無に近く、持っているのは方略的能力のみである」(大城・直山 2008)。両氏によると方略的能力を具体的に、「日本語を使用する」「言い換える」「ジェスチャーやものまねをする」などとしている。従来の英語教育においては、語彙や文法が分からないとコミュニケーションは停止してしまう傾向があったが、これは、学習の初期の段階で、コミュニケーションの方略能力を使う体験が不足していたことが、一つの原因と考えられる。そこで小学校外国語活動では、方略的能力を最大限に使わせるような活動を工夫し、考えや気持ちを伝え合うことができる態度を育むことをめざしたい。このことを意識して指導にあたることは、「コミュニケーション能力の素地を育む上で重要なこと」であり、中学校や高校に進学し、学習段階が上がるにつれて方略的能力をベースにその他

の能力を次第に身に付けていけばよいのである」と、大城・直山(2008)は述べている。

方略的能力を使い、自分の気持ちを何とか伝えようとする態度を育むには、自己表現の場を学習活動の中にいれていくことが有効である。児童が既習の内容から、自分で言葉を選択して自己表現し、実際の言語使用を児童に体験させることができる活動があれば、言語を実践的に使用できるようになっていく素地が育まれると考える。この点においては、タスク活動の設定が有効であるという先行研究が多い。「タスク活動では、課題や作業、あることを達成することが目的となるため、ごく自然な場面が設定され、その場面の中で課題や作業を遂行することになる。つまり、タスク活動において、慣れ親しんだ言葉はその手段として使うことになるため、適切な言葉を既習内容の中から児童が自分で選択し、相手に自分の思いを伝える言語活動が可能になるため、コミュニケーションの力の素地が育まれていく」(大城・直山 2008)。

甲府市の公立小学校では、文科省配付資料を主な教材に用いている。その実態を踏まえ、文科省資料の単元構成に、自己表現活動を取り入れ、公立小学校で実践可能なプランを立てた。表1は、基本型となるスタイルであり、第4時の自己表現場面では、大城・直山の論よりタスク活動を設定した。

時	活動・体験の種類	活動内容例	学習段階	気付き
1	○英語の音、リズム、表現に慣れ親しむ	歌・チャンツ 読み聞かせ	慣れる ↓	言語や文化への気付き
2	○慣れ親しんだ表現を使い、意味のあるやりとりをする活動	情報交換のあるゲーム	実際に使ってみる ↓	
3	自己表現活動	ロールプレイ	自分で言葉を選	
4	(タスク活動)	Show & Tell	び伝え合う	

(表1 自己表現活動を取り入れた単元プラン)

(2) コミュニケーションの質を高める授業

小学校の外国語活動では、細かい文法を理解したり、多くの語彙を覚えさせたりすることが目的でなく、「自分の考えや気持ちを伝えること」「相手の考えや気持ちを聞き取ること」が重視されている。この意味で、コミュニケーションの質を高める授業とは、活動の中に、「注意深く聞いて相手の思いを理解しようとしたり、他者に対して自分の思いを積極的に伝えようとしたりする」（文科省 2008）というやり取りの場面が設定されている授業であると考えられる。このようなやり取りがある授業を「コミュニケーションの質が高い授業」とし、実際に行った授業をもとに、コミュニケーションの質を高める授業づくりについての考察を進める。

① 授業づくりの観点

本年度、5 学年の外国語活動を学級担任として実践し明らかになったことは、自己表現の場があると児童は積極的にコミュニケーション活動を楽しむということである。では、どのような観点で学習活動を工夫していけば、児童は積極的に自己表現をするのであろうか。そこで、田中(2003)の先行研究に、筆者の授業実践、参観した外国語の授業や研修会から得た知見を合わせ、「コミュニケーションの質を高める授業」の実現に向けて工夫すべき点を、以下の5つの観点から述べる。

必然性…児童が、自然に英語を使って表現し始めるような状況や場面の設定

誰かにメッセージを伝えるという目的のために、自然な形で英語を使うように動機づけることが最大のポイントである。メッセージを伝える相手は、必ずしもネイティブスピーカーである必要はなく、児童の学習段階や個々の児童の様子を見ながら、学級担任、友達、ALT と段階を追っていく配慮も必要である。

具体性…だれに何をどのように伝える場面なのかを具体的にさせ、活動に取り組みせる

ALT が指示したことに、児童がすぐに取り組みないことがあった。児童の実態を十分に理解しておらず、活動の具体性を理解させぬままだったことが理由の一つであったと考えられる。学習活動の具体性を明確にすることは、教師にとっても、児童がつまづきやすい箇所をあらかじめ予想できる。

自己関連性…児童自身のことや身近で関連のある事柄を取り扱うこと

児童にとって身近な話題は、具体的にイメージしやすく、自信を持って活動に取り組むことができる。児童と多くの時間を過ごす中で、児童のレベルに応じて、関心のあるテーマは何なのか、学級担任はアンテナを高くして用意しておきたい。

自由度…児童自身の意志や判断によって自由に表現させること

言語表現における自由度を高めるとは、答えが一つではなく、児童自身の意志や判断によって主体的に表現させる部分を活動に取り入れることである。教師から表現内容を与えて表現を強要するのではなく、児童に考えさせて自由に表現できるようにすることである。

活用度…既習事項を生かして、言語表現を工夫させること 教師は計画的、意図的に既習内容をくり返し丁寧にインプットし続ける

自由度の高いコミュニケーション活動は、児童の力に任される部分が大きくなるため、児童自身の意志や判断が求められる。表現したいことをどうやって伝えればよいかを考えるのは難しいことのように思えるが、既習内容を使ったり方略的言語能力を駆使したりして、少し工夫することで質の高いコミュニケ

ーション活動に変えることができる。場面にあった適切な表現を自分の力で考え試行錯誤することこそ、中学校・高校でめざす実践的なコミュニケーション能力の育成につながる と考える。

②授業展開

コミュニケーションの質を高める手だてとして、5つの観点から教材を考え、言語活動の工夫を行った実践を提示する。

〔単元〕 外来語を知ろう (4時間扱いの3時間目)

〔目標〕

コミュニケーションに関すること

- ・ 欲しい物を積極的に尋ねたり、答えたりすること。
- ・ 自分の思いをはっきり伝えることの大切さを知ること。

言語や文化に関すること

- ・ 外来語とそのもとになる外国語では、発音に違いがあることの面白さに気付くこと。
- ・ 外来語は様々な国から日本に伝わった言葉であることを知ること。(国語科との関連)

〔単元の流れ〕

- ①授業ではじめの時間(10分)を、「言語や文化への体験的理解」を深める学習として単元を通して位置づけ、外来語をテーマに言葉の学習を進める。
- ②外来語を実際に使ってみる場面として、店での注文場面を取り上げる。実際に言語を用いてコミュニケーションを図る体験を通して、普段使い慣れていない外国語を使用することで、言語を用いてコミュニケーションを図ることの難しさを体験させるとともに、その大切さも実感させていきたい。

〔授業の流れ〕

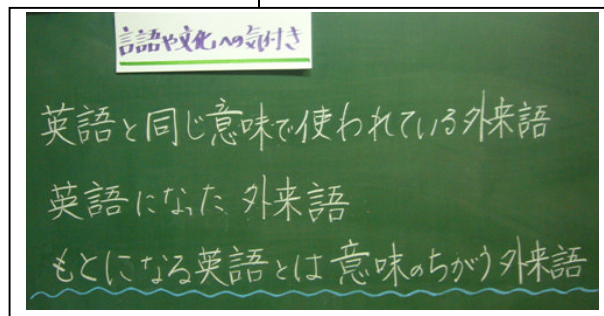
◆導入 ・ 英語の歌を歌う	◇クラス全員で歌うことで、英語を使った学習をする雰囲気を作る(意欲喚起)
------------------	--------------------------------------

◆言語や文化への気付き

- ・ 本単元名は「外来語を知ろう」である。国語科の学習と関連させて、外来語についての理解を深める。

◇必然性 活動の連携

コミュニケーション活動が主たる活動として取り上げられるが、外国語活動でいうコミュニケーション能力の素地は、「言葉や文化に対する理解」「外国語の表現への慣れ親しみ」を含めてのものである。そのため、言葉の気づきを促す活動を導入時に取り入れた。この学習を通して、「英語でコミュニケーションするには、発音は大切だ」と児童は気付き、次に学習する「英語に慣れ親しむ」活動が、児童にとって必然性のあるものになった。



【学習前】外来語について国語で学んだこと

【学習前】 外来語について あなたが知っていることを書いてください。

外国の言葉を日本で あがりがすいようにカタカナに
テレビ・キャバリ・ト・ナリ・カリンター・ペットボトル
トナリ

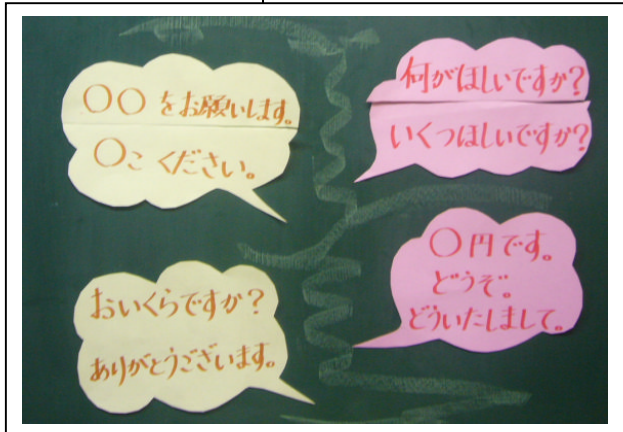


【学習後】外来語について外国語活動を通して、さらにわかったこと

【学習後】 外来語について あなたが知っていることを書いてください。

ヒンガとかキャベツは、日本になかった言葉と物が
いっしょに入ってきた。だけど、もともとあったものは
(サイダー・ガリン・ジョース)英語と外来語で「はいおが
ちから物もあると知った。

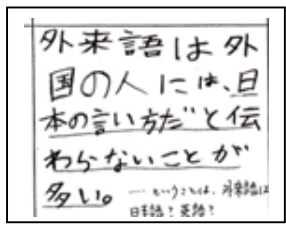
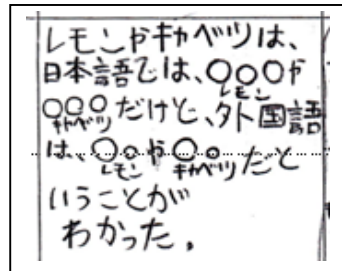
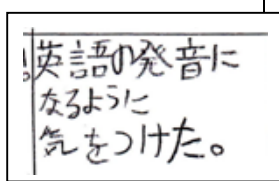
<p>◆表現活動 I</p> <p>・フルーツパフェを作る</p> <p>材料を購入するために、欲しいものを尋ねたり、答えたりする英語のやり取りを考える。</p>	<p>◇必然性 自由度 活用度</p> <p>教師が一方的に新しい表現を教えてしまうのではなく、児童にこれまでの学習を想起させ、持っている知識の範囲内で考えさせる。自分で考える言語活動は必然性が高くなり、気づきが大きくなる。</p> <p><活用した既習表現></p> <p>本時単元の表現:何が欲しいですか?</p> <p>lesson3: いくつ欲しいですか?</p> <p>lesson5: おいくらですか?</p> <p>lesson1: ありがとうございます。 どうぞ。 どういたしまして。</p>
---	--



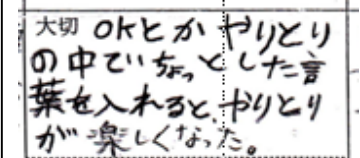
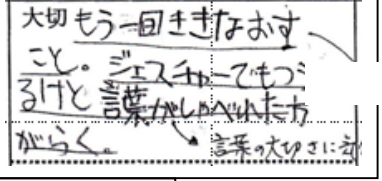
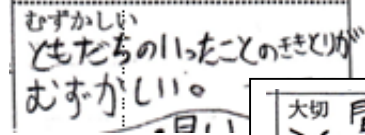
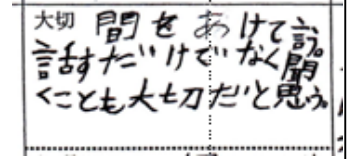
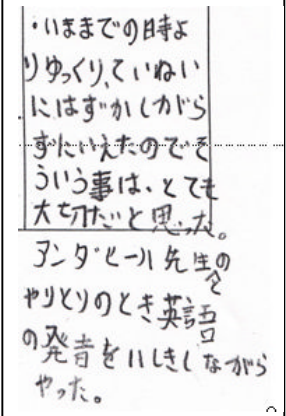
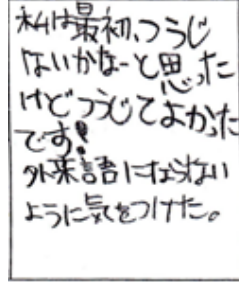
<p>◆活動の確認</p> <p>・教師が、指人形を使い、デモンストレーションを行う。</p>	<p>◇活動の連携</p> <p>児童が考えた会話の内容が、自然なものかどうかデモンストレーションを聞かせて考えさせる。児童は、「O.K.」「You are welcome.」「Thank you.」「Here you are.」などを入れると、やり取りが豊かになると気付いた。</p> <p>◇具体性</p> <p>児童が考えた表現活動が、どのようになるかを簡単にモデルを示す。英語に自信のない児童は、これを参考に表現活動がしやすくなる。</p>
---	--



<p>◆英語表現の慣れ親しみ</p> <p>・チャンツで英語に慣れ親しむ。</p> <p>Chant:</p> <p>♪What do you want? What do you want? What do you want? ♪banana banana A yellow banana please.</p>	<p>◇活動の連携</p> <p>この後に行う自由度の高い表現活動に向けて、英語表現に慣れ親しんでいく。慣れることで、児童は自信がついていった。</p> <p>◇自由度</p> <p>CD-ROM のモデルを参考に、自分の言葉に置き換えてチャンツを行う。モデルを唱えるだけだった活動から、* の部分を自分が表現したい言葉に置き換え、自己表現活動にする。自分の思いを伝えながら慣れ親しむこの活動は、児童にとって達成感や自信につながる。</p>
--	--



<p>◆表現活動 II</p> <p>・自分で用意した材料を使い、店員と客に別れてフルーツパフェの材料を購入し合う。</p> <p>*タスク活動: 英語を使うことが目標ではなく、英語のやり取りを通して、フルーツパフェの材料をそろえ自分のフルーツパフェを作ることを目</p>	<p>◇必然性</p> <p>外来語と英語の違いを認識しながら、フルーツパフェの材料を購入するために、英語でやり取りを行う。</p> <p>◇具体性</p> <p>「だれに 何を どのように伝えるのか」、「だれの 何を どのように聞き取るのか」を明確にさせることで、コミュニケーションの質を高める。</p> <p>◇自己関連性</p> <p>フルーツパフェの材料は、自分の好きな物ばかりではなく、友だちに購入し</p>
--	---

<p>的とした活動。さらに、次時では、自分のフルーツパフェをクイズ形式で紹介し合う。</p> <p>注) 児童の学習ファイルには、「コミュニケーション活動」で大切だと思ったことや難しいと思ったことを書かせた。</p>	<p>てもらえそうな物を用意して売る。コミュニケーションの場を考慮して材料を用意することで、より質の高いコミュニケーションが達成できる。</p> <p>◇自由度 店員と客に別れて、自由にコミュニケーションの相手を選ぶ活動をする。自由に相手を選ぶことでチャレンジ度が増し、児童の表現意欲も高まる。活動に消極的な児童は、個別に支援して参加させる。</p>
	
	
<p>◆学習のふり返り</p> 	<p>◇必然性 授業のまとめとして、今日の学習を目標と結びつけて児童に考えさせることで、学習の必然性が高まる。</p> 

3. 考察

(1)授業実践からの考察

必然性・・・決められた言語材料をくり返し質問するコミュニケーション活動では、丁寧に質問しなくても相手は何を質問されるか分かっているし、注意深く相手の発話を聞かなくても質問内容がわかりきっているの、「話す」「聞く」活動が雑になりがちである。しかし、「自分の思いを正確に伝えたい」「相手の気持ちを正確に聞き取りたい」という思いが児童にあると、必然的に児童はゆっくり丁寧に英語のやり取りをするようになる。友だちの英語を聞いている時も、自分の生活になぞらえて聞き、「そうだなあ」と考えて伝えたい事がわき上がってきたからこそ、自分の考えを積極的に伝えることができていたと思われる。児童が相手から情報を得たいがために質問をし、質問された側も「自分で考え、判断する」というコミュニケーションの必然性があると、コミュニケーションの質は高まる。

具体性・・・ALT の一方的な英語は理解できない児童も多く、“Let’s game.”と言われても何をどうしてよいか分からない児童も出ていた。そこで本単元では、まず児童に活動の具体的なイメージが持てるように、学級担任が活動のデモンストレーションをして、児童に、どのような場面で、誰に対して、どのようなメッセージを伝えるために言語活動を行うかを確実に捉えさせた。この場合、「言葉が持つ働き」（文科省 2008）を参考にすると、コミュニケーションの場面・目的・内容を具体的に児童に捉えさせやすい。活動が具体化したため学習ファイルにも、「話すだけでなく友だちの英語を聞き取る事も大切」「話す時には、ゆっくり丁寧に発音や声の大きさに気をつける」「聞きとれないときには、確認をする」などのコミュニケーションの質を高めていくためのてだてが、児童のことばで書かれていた。

自由度・・・本単元での自己表現力を育成するポイントとして、言語活動における表現の自

自由度を高めるため、2つの活動を取り入れた。1つは、品物は個々の店で売りたい物を自由に用意させる。2つめは、店での会話を児童に考えさせることである。前者では、客はどのような品物があるかワクワクしながら買い物に向かい、本当に欲しいものを自分で選んで購入する。英語の語彙が分からなくて購入をあきらめるのではなく、“This!”と指して要求していたし、店員も品物を指して確認をしていた。さらに児童は、本単元の表現である“What do you want?”“~,please.”だけではなく、既習内容から、“How many?”“How much?”を取り入れた。以前に学習した折にも難しかった12と20の言い方だが、児童は、客に代金を請求するときは12と20を言い間違えると代金請求ができないことを体験的に学習した。さらにlesson1から授業の中でくり返し行ってきた“O.K.”“You are welcome.”“Thank you.”“Here you are.”の「ちょっとした表現を取り入れることで、やり取りが楽しくなった」と児童もファイルに書いており、コミュニケーションを豊かにする言語にも気付いていた。

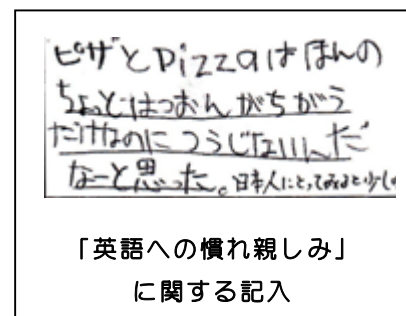
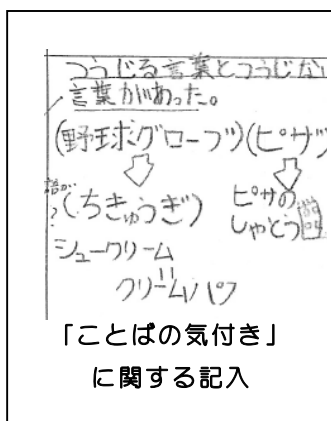
このように、自由度を高めるとは、児童自身に考えさせ判断させる余地を作ることである。言い換えれば、テキストにそって一方的にやらされる活動ではなく、自分から取り組む部分を活動に入れることである。児童は自分で判断し行動できるようになると、生き生きと活動に取り組みはじめる。友だちからどのような反応が返ってくるのか、活動がチャレンジになってくるからである。

5観点からの工夫を行ってきたが、その他、授業の中で児童の変容が見られた注目すべき2点について述べる。

①消極的な児童への支援…本単元で注目すべき点は、他教科で発言に消極的な児童Aが、積極的にコミュニケーション活動を行っていたことである。表現の自由度が高いということは、児童に考えさせ実際に活動に取り組む

必要が出てくるため、意欲が大切になってくる。はじめのうちは他教科の授業と同様にAは、「自信がない。難しい。覚えられない。」と訴えた。しかし学習が、「正しく英語表現をする」ことではなく「伝えるためにどうするか」ということであると気付くと、進んで表現し始めた。自分で何とか表現しようと、ジェスチャーや絵に表したり、欲しいものを指さしたり方略言語能力を駆使してやり取りを始め、クラスの仲間や担任にも分からないところを質問するようになった。何よりも、誤った発話をしていても正しい表現を友だちや教師が自分の英語に重ねて言い返してくれるので、安心して自分の表現を口に出せるようになった。相手の児童も一生懸命聞き取ろうとして、Aの表現を聞き返し確かめたりする場面がでてきて、Aは英語を使い楽しくコミュニケーション活動ができるようになっていった。

②評価方法…単元の最後には、学習した事項をふり振り返りながら、外国語活動を通して身に付いたことを児童にも認識させた。本単元では学習ファイルに「言語や文化への気付き」「慣れ親しみ」「コミュニケーション活動」の3つの視点で児童に記入させ、コミュニケーションの質の高まりの評価を行った。



(2)成果
本研究で明らかになったことは、自己表現活動を中心に授業を構成すると、コミュニケーションの質が高まり、児童のコミュニケー

ション能力の素地が育まれていくということである。5つの観点から授業を組み立てていったことで、「言語や文化に対する理解」「外国語の表現への慣れ親しみ」の学習の深まりもあった。これは、児童の学習ファイルから評価できる（表2参照）。

(3)課題

新設された「外国語活動」が完全施行されて1年が経つが、まだまだ現場教師の不安は大きい。研究開発校などの個別の学校や地域の独自の実践が、徐々に広まり「全体の取組」になりつつある中で、本研究が少しでも学級担任が進める外国語活動の授業づくりに役立つように考察した。今後も、個別の取り組みではなく、全体の取り組みであることを充分認識して実践していきたい。

所属校では本年度、外国語活動実践を校内研究に位置づけ、同一学区の小学校や児童が進学する公立中学校へ校内研の案内を送付し、情報交換を試みた。今後、管理職や教育委員会の支援をうけながら、確実に実行に移していくことが、これからの課題である「小小」や「小中」連携につながると考える。

引用・参考文献

青木昭六『英語授業実例事典 2』大修館書店 1992
 ベネッセ 2010『小学校英語に関する基本調査』
<http://benesse.jp/berd/center/open/report>
 久埜百合『子どもと共に歩む英語教育』ぼーぐなん 2008
 文科省『英語ノート1』『英語ノート2』2008
 文科省『小学校学習指導要領解説「外国語活動編」』2008
 文科省『中学校学習指導要領解説「外国語活動編」』2008
 オコナー&アーノルド『イギリス英語のイントネーション』1994 南雲堂
 大城賢・直山木綿子編著『小学校学習指導要領の解説と展開 外国語活動編』教育出版 2008
 田中武夫・田中知聡著『自己表現活動を取り入れた英語授業』大修館書店 2003
 土江和世「小学校外国語活動の充実に向けたカリキュラム開発(2)」奈良教育大学院 2010

(表2) 児童学習ファイルより

<p>【言語や文化に対する理解】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 外来語とそのもとなる言葉では、意味違ってびっくりした。 ・ 物といっしょに言葉もつれられてくる。 ・ フランスの人が英語を話すと、なまりが出る。 ・ 英語と違う意味で使われている外来語があることをはじめて知りました。 ・ 外来語は、ほとんどアメリカで生まれたと思っていたけど、イタリアやアラビアからも外来語が来たなんてとてもビックリしました。 ・ 日本語も他の国の外来語になっていること ・ 私は、ハンドルは英語でもハンドルと思ったのに、全然違うものでビックリしました。
<p>【積極的にコミュニケーションを図る態度】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ はじめは伝わるかどうか自信がなかったけど、言いたいことが伝わってうれしかった。 ・ 店の人は、13と30をまちがえないように伝えることが大切。 ・ 友達の言ったことの聞きとりはむずかしい。 ・ 話すだけでなく、聞くことも大切だと思う。 ・ 友達の言ったことを確認すると、聞き取れる。 ・ 間をあけて言ってほしい。ゆっくりしていねいに。 ・ OKとかサンキューとか、ちょっとしたことを言葉に入れると、やり取りが楽しい。
<p>【外国語の表現への慣れ親しみ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ レモンやキャベツは日本語では、○○○や○○○だけど、英語だと○・とか○・・とわかった。 ・ 外来語は、外国の人には、日本の言い方だと伝わらないことが多かった。 ・ (外来語が)英語の発音になるように気をつけた。 ・ ピザは最初通じると思ったのに、FETには通じなくて、ピサの斜塔とまちがえられてしまった。ピザとPIZZAはほんのちょっと発音が違うだけなのに、つうじないんだなーと思った。 ・ 二個以上数えるときに、ズを最後に付けることを忘れてしまう。分かっているけど言えない。 ・ ストロベリーを英語で言うのはむずかしい。